

## 古活字版の展開を追う : 慶長・元和・寛永

KOAKIMOTO, Dan / 小秋元, 段

---

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2012-03

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520206

研究課題名（和文） 古活字版の展開を追う—慶長・元和・寛永—

研究課題名（英文） Following the Development of *Kokatsuji-ban*-Keichō, Genna, Kan'ei-

研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO DAN)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30281554

研究成果の概要（和文）：本研究は、17世紀初頭の約40年間に流行した日本の活字出版（古活字版）の展開の様相を明らかにしたものである。主な研究成果は、第一に、慶長年刊の角倉家のネットワークが古活字版の出版活動に広く影響を与えたことを明らかにしたこと、第二に、高野山における古活字版出版の経緯を書誌調査を通じて明らかにしたことである。そして、第三に、近年、古活字版の起源をキリシタン版に求める学説が強まっているが、その問題点を学界に提起したことも、重要な成果であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：My research elucidates the particulars of the development of *kokatsuji* publishing (early moveable type imprints) that spread throughout Japan during the first forty years of the seventeenth century. I make clear the broad effect that the Suminokura family network had on *kokatsuji-ban* publishing activities during the Keichō years (1596-1615), and through a bibliographical survey reveal Mt. Kōya's *kokatsuji-ban* publishing process. Furthermore, theories that seek the origin of *kokatsuji-ban* in Christian publishing (*kirishitan-ban*) have become increasingly refined of late, and a significant aspect of my research was to have contributed topics concerning this subject to academia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：古活字版・書誌学

## 1. 研究開始当初の背景

古活字版が持つ日本出版文化史上の重要性は、早くから認識されていた。中でも、川瀬一馬氏によって著された『増補古活字版之研究』（ABAJ、1967年。初版は1937年）は金字塔的研究書である。川瀬氏の研究は現

存する古活字版を網羅的に調査し、各作品の版種の分類、刊行時期の特定などを通じて、古活字版全体を整理・分類するものであった。これによって後続の研究者は多大な学恩を蒙ることになったのであるが、一方で川瀬氏の記述には誤認も少なくない。後進に課せら

れた責務は川瀬氏の研究を再検討し、補訂すべきところは補訂し、氏によって築かれた基礎情報の精密の度を高めることにある。そして、こうした作業を通じて、古活字版刊行の実態はより明確に立ち現れてくる、という考えが、本研究を志した理由である。

2006年に私は『太平記と古活字版の時代』（新典社）という研究書を上梓した。ここでは川瀬氏の研究を再検討し、古活字版の『太平記』の悉皆調査を行い、版種の審定、系統の分類、流布の状況を明らかにした。このように川瀬氏『増補古活字版之研究』を再検討することにより、新たにわかる事実は多い。しかし、研究開始当時は、古活字版研究を専門とする研究者の数は限られており、川瀬氏以後、研究の進展していない作品も多数あるという状況にあった。多くの版種が存在し、その当時流布したと考えられる作品についても、諸版の整理や本文検討がなされていないものがままあるのが実状であった。こうした状況のもと、私は拙著で培った調査・研究の方法をこうした作品に適用することにより、古活字版の刊行にまつわる様々な実態を浮かび上がらせようと考えたのである。

## 2. 研究の目的

本研究は日本の出版史上、極めて重要な役割を果たした古活字版の刊行の実態をより詳しく解明するために、その盛時である慶長・元和・寛永の各期の主要資料に焦点をあて、書誌学的・文献学的に調査・考究することを目的とした。

より具体的にいえば、本研究では多くの版種が存在し、広く流布したと考えられる複数の古活字版作品をとりあげ、諸本を原本により悉皆調査し、各版の本文異同の検討を行う。そして、諸本の先後関係を確定し、各版を文献学的に位置づける。また、主要伝本における所用活字を分類・整理し、その活字が他書においてどのように使用されているかを追跡調査することにより、当時の印刷工房の活動の実態を明らかにすることを目的とした。

調査対象となりうる作品はそれこそ枚挙に遑がないほど存在するが、限られた期間で一定の成果をあげるため、絞り込みが必要であった。そこで本研究では、以下の3つのテーマを設定した。

(1) 要法寺版と『重撰倭漢皇統編年合運図』

(2) 大坂陣と『大坂物語』の刊行

(3) 寛永期平仮名活字本と『枕草子』ほか

『重撰倭漢皇統編年合運図』『大坂物語』『枕草子』等の作品をとりあげたのは、これらの書が比較的多くの版種を持ち、慶長・元和・寛永の古活字版の展開をたどるに適切な対象と考えたためである。同時に上記のテーマとかわりうる書物にも広く目配せをしながら、研究を進めることをめざした。それ

により、古活字版がいかにして誕生から隆盛を迎え、商業出版に結びついていったのかを、時系列に沿って解明できると考えたためである。

## 3. 研究の方法

本研究は3年間にわたって、古活字版として刊行された複数の作品を主軸に据え、当該諸版ならびに関連諸版の(1)原本による書誌調査、(2)本文研究、(3)活字調査、を実施するものである。

(1)の実施にあたっては国内の所蔵機関に向き、調査を行い、必要に応じて写真撮影を行う。(2)については主要伝本の複製の収集を行い、本文を比較検討して各版の先後関係の特定や本文の持つ諸問題の抉出に努める。(3)については調査対象となる諸版の画像データをもとに、活字の同定作業を行う。これが具体的な方法である。

なお、2に記述したように、申請時には『重撰倭漢皇統編年合運図』『大坂物語』『枕草子』を主な対象作品とすることを予定していた。しかし、研究開始後、印刷博物館による高野山霊宝館の資料調査団の一員に加わるという僥倖に恵まれた。高野山霊宝館には、これまで十分な研究がなされてこなかった、高野山開版の古活字版が多数収蔵されている。よって、これを機に当該書物群を集中的に調査・研究することも、研究テーマに加えることとした。この時期を逃しては、永遠に調査の機会を与えられることはない判断されたことと、高野山の古活字版も慶長・元和・寛永にわたって開版されつづけたため、本研究テーマの一部を構成しうるものと考えたためである。

また、研究の進展とともに、古活字版の起源について考究することも不可欠であることを痛感するにいたった。後述するように、現在学界では朝鮮活字版を古活字版の起源とする従来の考えに疑義が投げかけられ、新たにキリシタン版に起源を求めようとする論説が力を得ている。しかし、その説には根拠薄弱な部分があり、古活字版の研究に携わる者として、古活字版の起源を見極め、キリシタン版起源説の問題点を検証する必要があると考えた。よって、本研究では必然的に慶長以前の文禄年間の古活字版の状況も研究対象に含み込むこととなり、あわせて朝鮮古活字版、キリシタン版と古活字版の関連も考察することとした。

## 4. 研究成果

まず、2の「研究目的」に記した(1)「要法寺版と『重撰倭漢皇統編年合運図』」については、国立国会図書館、天理大学附属天理図書館、名古屋市蓬左文庫等が所蔵する『重撰倭漢皇統編年合運図』について原本調査を

行い、版種の審定、本文の検討を行った。その成果の一部は、大澤顯浩氏編著、学習院大学東洋文化研究所叢書『東アジア書誌学への招待』第2巻（東方書店、2011年12月）所収、小秋元著「慶長年間における古活字版刊行の諸問題」に発表した。本論考では、古活字版の刊行が隆盛に向かう時期である慶長年間の出版環境について考察した。古活字版は文禄から慶長の初期にかけて後陽成天皇や徳川家康などの支配階級によって刊行されはじめるが、それが民間に広まるにあたっては、京都の嵯峨に印刷工房をもった豪商角倉素庵が大きな役割を果たした。本論考では、素庵が刊行した古活字版『史記』をとりあげ、刊行年次（慶長八年以前）の推定を行い、その後、華麗な国書美装本である「嵯峨本」が刊行されてゆく背景を論じた。また、角倉素庵は当代を代表する儒者でもあり、その門下の儒者・医者が多く古活字版出版を手がけている。本論考では、そのなかの代表的な人物である五十川了庵をとりあげ、素庵との縁故関係と古活字版『太平記』の刊行背景についても論じた。さらに、角倉素庵の出版界における影響は要法寺の古活字版刊行にも及んでいた。要法寺では日性が『重撰倭漢皇統編年合運図』をはじめとする書を多数刊行していたのだが、そのうちの慶長十五年版『太平記』の刷反古が嵯峨本の表紙の裏張りに使用されているなどの現象が認められる。この事実は角倉と要法寺の両工房の関係を裏づけるものとして注目される。およそこのような慶長期の出版界の状況を、本論考では俯瞰的に論述した。

つぎに、(2)「大坂陣と『大坂物語』の刊行」、および(3)「寛永期平仮名活字本と『枕草子』」については、研究期間内に国立国会図書館、国立公文書館、東洋文庫、学習院大学、天理大学附属天理図書館等に調査に赴き、資料調査と写真撮影（一部）を行った。現在、お茶の水図書館成篁堂文庫、大東急記念文庫が閲覧休止中であるため、なお調査に完全を期しがたい部分があるため、閲覧再開後、その成果を論文として公表したいと考えている。

つづいて、高野山霊宝館における調査の成果について記す。同館へは2010年1月、6月、10月に計9日間、調査に訪れた。同館に寄託されている金剛峯寺、宝寿院等の中世・近世刊本を多数、調査することができた。そのなかで本研究テーマと関わり深い資料としては、慶長頃刊『御請来目録』、慶長頃刊『雑問答』、寛永頃刊『雑問答』、寛永頃刊『光明真言抄』、西禅院蔵高野版木活字等があげられる。その調査結果は、2011年印刷博物館春期企画展図録『空海からのおくりもの—高野山の書庫の扉をひらく』（凸版印刷株式会社印刷博物館、2011年4月）第四章「仏教信仰

がはぐくむ古活字版」において公表した。その眼目を述べると、まず、現存する高野山内開版の古活字版のうち、刊行年次が判明している最古のものは幸悦刊『四種曼陀羅義』（慶長十三年刊）である。従来は、「慶長九年刊」と称されてきた『光明真言抄』が最古のものとされてきたが、原本調査の結果、同書は活字や版式の趣から、明らかに寛永頃の刊行であるといえ、従来の見解は跋語の年次を刊語の年次と読み誤ったため生じたものと判定される。高野山における古活字版は、慶長の十年代に幸悦が刊行したものを主流とし、大ぶりで堂々とした書風の活字を使用することを特徴とする。それが、元和・寛永にいたると浄善の開版本が中心となる。浄善開版本の活字は、幸悦のそれと比べるとやや小ぶりになっており、附訓活字を多く含むことを特徴とする。実はこうした活字・版面上の特徴の変遷は京都の古活字版の変遷とも共通しており、このことは高野山における活字出版の営みが、京都のその影響を強く受けていたことを想像させるのである。なお、これらの見解をまとめるにあたっては、高野山霊宝館のほか、京都大学附属図書館、大阪府立中之島図書館での資料調査も行った。

最後に、古活字版の起源に関する問題である。従来、古活字版は文禄の役を通じてもたらされた朝鮮活字版が起源であると考えられてきた。だが、近年、大内田貞郎氏・森上修氏をはじめとする研究者は、活字版の印面調査の結果から、古活字版の起源を同時期に日本に流入したキリシタン版に認める説を提唱し、それが一定の支持を得るようになってきている。両氏は、朝鮮の活字印刷が植字盤に固着材を敷き、そこに活字を並べる形式（付着方式）であったのに対し、キリシタン版と古活字版は組み並べた活字を四周の匡郭で締め付け、固定する形式（組立方式）であるという違いに注目している。しかし、朝鮮活字版の技法について記した『李朝実録』世宗三年三月丙戌日条、同十六年七月丁丑日条、同十七年八月癸亥日条、『慵斎叢話』巻七などを読めば、李朝活字版は組立方式も採用していたことがわかり、それは現存する朝鮮古活字版を見ても裏づけられる。そのことを重視するならば、朝鮮活字版は日本の古活字版の起源としての資格を十分備えているといえるのである。古活字版には、書体や装訂に朝鮮版の影響を強く受けているものが見うけられる。だとしたら、印刷技術そのものも朝鮮よりもたらされたと見るのが穏当で、従来の通説をくつがえす必要はないといえる。そのことを論文「古活字版の淵源をめぐる諸問題—所謂キリシタン版起源説を中心に—」（『国際日本学』第8号、2010年9月）で主張した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 小秋元段「古活字版の淵源をめぐる諸問題—所謂キリシタン版起源説を中心に—」、『国際日本学』第8号、221～237頁、2010年、査読無

[図書] (計2件)

- ① 井筒信隆、大沼晴暉、小秋元段、白石克、牧野和夫、中西保仁、前田伸幸、凸版印刷株式会社印刷博物館刊、2011年印刷博物館春期企画展図録『空海からのおくりもの—高野山の書庫の扉をひらく』、2011年、全247頁のうち、64,67,94—116,127—128,138—140,182—186,190—194を担当。
- ② 大澤顯浩氏編著、石橋崇雄、吉田光男、八尾隆生、小秋元段ほか11名、東方書店刊、学習院大学東洋文化研究所叢書『東アジア書誌学への招待』第2巻、2011年、全264頁のうち、61—77頁を担当。

[その他]

ホームページ等

法政大学学術研究データベース

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profile/s/15/0001451/profile.html>

小秋元段個人サイト

<http://www18.ocn.ne.jp/~koa/index2.html>

講演 小秋元段「高野版とはなにか」、2011年6月19日、於印刷博物館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小秋元 段 (KOAKIMOTO DAN)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：30281554